

歴史を語る建物たち

第8回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

エコロジーガーデン「原蚕の杜」(新庄市)



JR新庄駅東口から国道13号線を2kmほど北上し、左に折れて500mほど進むと、国指定史跡である新庄藩主戸沢家墓所の手前に、細長い建物が点在する広大な敷地(約10ha)がある。

平成12年に閉所した、旧農水省蚕糸試験場新庄原蚕種試験所の跡地で、現在はエコロジーガーデン「原蚕の杜」として、資料室や産直施設などを備えた緑地公園となっている。

近代国家ニッポンを支えた「絹」

日本では、弥生時代に中国から絹の製法が伝わったと言われ、山形県でも、8世紀前半(和銅年間)にはすでに養蚕が行われていたという記録がある。

幕末における、鎖国から開港への変革後は、絹が日本の重要な輸出品となり、養蚕業・製糸業は、明治以降の日本が殖産興業によって近代化を進める上で大きな役割を果たした。ちなみに、昭和初期の生糸および絹織物の輸出額は、輸出総額の4割以上を占め首位となっている。

しかし、この頃から、人造絹糸製造技術の発達や海外での機業の進歩などによって、安価で良質な生糸の安定供給が必要となった。そこで、昭和9年、原蚕種管理法が制定され、養蚕業・製糸業が国の管理下に置かれると、国の蚕業試験場も拡張され、出先機関も増設された。



完成当時の試験場。上：全景遠望、下：正門および庁舎
資料：ふるさとの思い出写真集(明治・大正・昭和)「新庄」

そうした中、新庄町（現：新庄市）では約8町歩の土地を国に寄付し、出先機関の誘致を図った。そして、同年、蚕業試験場福島支場新庄出張所が設置された。

なお、東北地方で誘致を図った自治体は他にもあったが、最終的に新庄に決まったのは、当時の蚕業試験場長（平塚栄吉、新庄市名誉市民第一号）が新庄出身であったことも影響していると思われる。

新庄経済の希望の星

新庄出張所の設置は、地元から大きな歓迎を受けた。桑園栽培など、出張所敷地内での雇用は年間延べ3,000人程度と見込まれ、豪雪地帯にあつて近代化による地域開発が遅れた新庄町では大きな受益が期待されたからである。

一期工事が竣工した昭和10年10月18日に、農林省蚕糸局長、平塚栄吉・蚕業試験所長、山形県知事などを迎え、開庁式が行われた。マスコミも大々的にこれを報じ、翌日の山形新聞では、一面全面を同記事に充て、「現代の粋を集めた理想的蚕室」とたたえた。また、町役場では、昭和9年に新設された農林省積雪地方農村経済調査所（雪調、昭和58年閉鎖）と合わせ、「町の発展上慶賀に堪えない」（山形新聞記事）ことから、急きょ臨時町議会を開き、協賛費300円（現在の約100万円）を計上して祝賀会を開いた。

さらに、昭和12年には新庄出張所から蚕糸試験場新庄支場に昇格し（同年、国の蚕業試験場も蚕糸試験場に改称）、さらなる設備の拡充が図られた。なお、初代支場長には、県の初代蚕糸課長であった長瀬光発が着任した。

戦後は、蚕糸試験場新庄原蚕種製造所、同新庄原蚕種試験所、東北農業試験場新庄試験地などと名称が改められ、長年にわたって山形県における蚕業の研究・指導に貢献してきたが、平成12年3月末をもって66年間の役目を終え、敷地・建物は国から新庄市に譲渡された。

バイオマス研究の拠点として

国からの譲渡を控え、市では敷地などの跡地利用を考える市民懇談会を発足させ、議論を行った。懇談会では、宅地造成、公共施設（市庁舎、病院など）の移転・建設、四年制大学の誘致など、様々な意見が出されたが、最終的には、敷地・建物をそのまま残し、当時最上地方の自治体が進めていた「最上エコポリス構想」（自然との共生を目指した地域づくり）を原点としたエコロジーガーデンとして活用することになった。

その一環として、平成14年に早稲田大学大学院の研究プロジェクト拠点となる早大新庄バイオマスセンターがオープンし、建物内に研究室を設けて、サトウキビの一種を原料にしたエタノール製造や、微生物に



試験場時代の農機具庫を改装して平成十四年にオープンした「産直まゆの郷」。新庄市初の常設産地直売所として、年間七万人以上が訪れる人気スポットだ。

よる生ゴミの堆肥化など、主に生物体をエネルギーに変える研究が行われた（プロジェクトは平成16年から玉川大学に継承）。

一方、最上地域で産直活動を行っていた団体が集まって、平成14年に「しんじょう産地直売所運営協議会」が結成され、かつて試験場の農機具庫だった建物を市が改装して、常設型の産地直売所「産直まゆの郷」をオープンした。新鮮な野菜などをいつでも買えることが人気を呼び、現在では年間7万人以上が訪れ、売り上げも年間1億円に迫る勢いだ。

ちなみに、「産直まゆの郷」やエコロジーガーデン「原蚕の杜」の愛称は、公募によって命名されたものである。

意外と知られていない桜の名所

さて、肝心の建物（本部棟、実験棟など）だが、市では、「長年の利用でかなり改装されているので、往年の姿に復元したい思いはあるが、市の財政事情から、現状は維持・補修が精一杯」と苦しい胸の内を語るが、一方で、「当時の窓ガラスや屋根瓦など、今となっては再生不可能なものもある。今後も市のシンボルとして、景観に配慮したアカデミックな雰囲気を感じたい」と話している。

なお、元々農業関係の施設だったこともあって、敷地内には桜やケヤキ、松など、3,000本以上の樹木が植わっている。桜が満開の頃や新緑の季節などは、絶好の散策路である。

しかし、課題はPR不足にあるようだ。先頃、建物内のイベント室でコンサートが開催された際、来客の1人が「かつて国の施設だったところなので、構内は立ち入り禁止だと思っていた」と語っていたのがそれを如実に表している。

市では、平成19年度～23年度の「エコロジーガーデン利用計画」を策定した。今後は積極的なPR活動によって訪問客（交流人口）が増え、建物の往年の姿への復元に、再び希望の光が差すことを期待したい。

（荘銀総合研究所 研究員・山口泰史）